

令和5年度 大田区立入新井第五小学校 校内研究 成果報告

- 文部科学省・国立教育政策研究所 教育課程 実践検証協力校 令和2～5年度
- 大田区教育委員会 特色ある学校「生きる力」を育むプログラム 実践研究校 令和5年度～

I 特色ある教育活動のテーマ

「 予測困難な時代を生きていく児童の適応力の育成 （副主題）～主体的・協働的な学習を通して～ 」

予測不能と言われる現代。目まぐるしい環境変化により、児童も成長の過程で様々な不安や戸惑いに遭遇する。だからこそ、いかなる状況下においても自信を失うことなく、力強く生きていく力を身に付けさせる必要がある。

今年度、「生きる力」を育成する上で、「適応(力)」という言葉 키워ドとし、「学校・学級に適応」「社会や地域に適応」「仕事や働くことに適応」「今日的な課題に適応」という四つの分野における力の育成を図った。様々なことに適応できる力は、「特別活動」「道徳科」の他、「生活科・総合」の取組を通して検証してきた。

II 主な取組内容

(1) 学校・学級に適応プロジェクト（人・人々に適応）

本プロジェクトでは、学校（学校行事・集会活動・委員会・クラブほか）・学級（学級活動）における集団活動を通して、人間関係づくりに励ませ、人（集団）に適応できる力を身に付けさせた。将来、社会に出たとき、人はどうしても他の人とのかかわりをもたざるを得ない。したがって、社交性・協働性ほか様々な力を有していることは、生きる上で最大の強みとなる。本プロジェクトでは、特別活動とりわけ学級活動の充実を主眼に置き、自分たちの力で、互いに折り合いをつけながら、誰もが納得できる決定を導き出せる集団の中の自分を意識させ、人と人、相互の関係に適応できる力を身に付ける経験を積ませた。検証授業として、学級活動（1）の学級会における合意形成による集団決定と学級活動（3）ダイバーシティ（年齢・性別・人種・宗教・国文化・趣味嗜好の多様性を受け入れる）についての取組を進めた。

(2) 社会に適応プロジェクト

本プロジェクトでは、地域社会との関係を主眼に置き、町会・警察等官公庁・地域ボランティア、民生児童委員など公的役職の方々など、多方面の人材との連携を図った。児童一人一人が地域の人々から守られていることを実感することから始め、いつかはその経験を地域に還元していこうという、社会貢献の芽生えにつなげる学習を展開した。1つ目として、どこの学校でも第3学年が実践している地域安全マップをより地域の方々と共有する活動を展開したことである。現状、各学校での地域安全マップ作製の取組はほぼ形骸化しており、でき上がったマップを廊下に掲示して終わりというのが実態である。そこで、改めて本取組に、更なる価値をもたせるため、地域と共にその活動を充実・発展させられるようにした。児童の作成したマップは町会の回覧板で回覧されたり、所轄の警察に掲示してもらったりという具合に、取り組みの範囲を広げ、内容の充実を図った。もう一つは、「子どもが取り組む学校防災拠点訓練」の実施である。どの町会も高齢化が進み、訓練やそのスキルの確認は行われるものの、実際の災害場面で十分機能するかと言えば正直なところ疑問が残る。すなわち、後継者不足なのである。そこで、児童にその訓練を体験させることにより、将来、自らが災害に立ち向かい地域貢献できる素地が育つように、意識の芽生えを目的とした学習を展開したわけである。以上の取組によって、着実に地域社会に適応する力は育っているものと考えられる。

(3) 働くことに適応プロジェクト

大田区の「おおたの未来づくり」の柱の一つである「働く」ことへの理解についての学習である。本校の周りには、伝統的産業としてノリの養殖・加工の歴史がある。今も周辺地域には老舗となる海苔問屋が点在する。その一つ守半海苔店との相互交流により、調べ学習・体験学習を経験させていただき、そこから発展させた販売という仕事に目を向けさせ、より良い商品をより手ごろに、伝統と格式を維持させながら「売る」という労働について考えさせた。「10歳のハローワーク ～働くってどんなこと？～」をテー

マに学習を展開したわけである。もう一つは、1年生による落ち葉掃きの取組である。秋も深まるとたくさん落ち葉が用務主事の力によって清掃されている。日ごろ何の気なしに見ていることも、実際に落ち葉を集める活動を体験してみると、仕事としての労力・時間・大変さということを実感する。その一方、人のためになっていることへの喜びや、きれいになっていく心地よさも体感できる。それらの、体験したからこそ分かる感覚をもとに、一年生なりの働くことへの意識づけを試みた。主に総合的な学習の時間・生活科の学習を通して、働くことへの適応力の育成を図ることができた。

(4) 今日的な課題に適応プロジェクト

本プロジェクトでは、児童を取り巻く様々な問題への適応力を身に付ける学習を重ねた。昨年度までの研究においても、特別活動(2)において、「SNSとの正しいかかわり方」「いじめについて考える」「フワフワ言葉・チクチク言葉」「バランスの良い食事(食育)」など、様々な今日的課題に対する知識の習得・危険回避等の術について学んでいる。しかし、児童を取り巻く今日的課題は年々その内容が増え続けており、児童を取り巻く環境はより複雑化している。今年度の取組は、6年生における「主権者教育」(文部科学省学習推進事項)と「学力向上へ向けた日常学習の改善」についてである。今、日本は選挙への投票率が下がり続け、国民の政治離れ・一票の価値への軽視が課題となり、民主国家における基盤そのものが揺らぎかねないといった実態がある。それらの問題解決のために、文部科学省が具体的取り組みとして立ち上げた学習内容である。また、学力向上は常に児童生徒にとって最も身近な課題であることはわかっている。自らが学習方法や姿勢について考える機会は少なく、そのことが学力の向上の妨げとなっていることも少なくない。より効率的かつ内容の伴った学力向上に向け、他からの刺激を受け、自分を奮い立たせる機会を意図的に設定することによって、自己改革へ結びつけさせようという取組に着手したわけである。児童はこれら様々な今日的な課題に正対し、真剣にそれらのことに適応しようとする姿勢が見られるようになっている。

III 取組の成果と課題(成果指標の達成度も含めて記載)

「適応する力」を「生きる力」と結び付け、その関連性において多角的な検証を行い、児童が生きる上で必要となる様々な知識を身に付ける取組を進めることができた。「経験したことがある」「そのことを知っている」とはっきり言える経験を高めさせたことにより、不安や戸惑いに立ち向かえる免疫的な力が着実に身についてきていると感じる。「知らない」から「知っている」子どもたちを増やすこと。知っているからこそ、生きる力として役立てながら生活できることを、今後も証明しながら、児童の様々な課題への適応力を高めていきたい。

とりわけ、今後の課題への解決事項・来年度への研究の展望として、現在の四つの視点において遣り残している学習項目についての追究活動・来年度も継続する文部科学省・国立教育政策研究所 実践検証協力校の取組を継続し、今年度同様、大田区小中88校に、研究成果資料としての冊子提供に取り組み所存である。

IV 成果指標の達成度にかかわる検証

申請当初の成果指標及び目標数値に対する11月末日現在の児童調査(グーグルフォームにて)の結果は、どの成果指標に対しても数値の伸びが見られる。ただし、実際にはあいまいな根拠による回答もあり、研究への取組やその成果として反映された数字かどうかの検証が今後必要である。年度末に信憑性のある数値であるかどうかの考察を行い、来年度への更なる研究につなげていきたい。以下が、調査の結果である。

- 4:さまざまな場面で適応力を発揮し、自分から自信をもって問題を解決することができる。65%➡77%
- 3:児童を取り巻く今日的な課題への適応力を身に付け、自分なりに対処することができる。80%➡84%
- 2:地域の方々との交流を通して適応力を身に付け、地域に貢献しようとするすることができる。80%➡91%
- 1:学校や学級への適応力を身に付け、自分が集団の一員として行動することができる。80%➡87%